

「地蔵盆の運営実態と地域のレジリエンス向上に果たす役割に関する研究」

(指定課題：地蔵盆などの地域の伝統行事の現状と地域コミュニティ活性化への影響)

研究代表者 前田昌弘 (京都大学大学院工学研究科・研究員)

共同研究者 森重幸子 (京都大学大学院工学研究科・研究員)

研究協力部署 文化市民局地域自治推進室地域づくり推進担当

1. 研究概要

1. 1. 研究の背景と目的

京都市の都心部では近年、コミュニティ形成の困難化や地域運営の主体の不足といった、地域の自治力の低下に関わる問題がみられる¹。このような問題を受け、町内と元学区、およびそれぞれの自治を担う町内会と自治連合会という、京都特有の重層的な地域コミュニティの構造²を維持し、問題の“緩和”を図ることが重要であると考えられる。一方で、上記の問題の要因にもなっている住民の高齢化、およびマンション建設やミニ開発に伴う住民の転入等を新たな状況と捉え、地域コミュニティの再編をも見据えつつ、それら新しい状況への“適応”を図ることも不可避であると考えられる。しかし、地域によって事情は様々であり、地域コミュニティの継承と再編に向けた共通の方策は見出されていない。

一方、京都において地蔵盆は、町内の人々によって営まれてきた、①地蔵菩薩のお祭り、②子どもの安全祈願を中心とする行事である³。地蔵盆は、それ自体が歴史的・文化的な価値を有する資源であるが、近年は、地域および行政からコミュニティ形成や地域運営の主体育成の手段としても期待されており、様々な取り組みが行われている⁴。しかし、町内会等と同じく、地蔵盆についてもやはり、地域の自治力の低下や子どもの減少などを背景として行事の簡略化や廃止といった状況が近年はみられ、存続が危ぶまれている。したがって、地域コミュニティにおける地蔵盆の役割とその活用方策を探るにあたって、まずは地蔵盆の実態を具体的に把握することが不可欠である。

以上の背景を踏まえ、本研究は、まず、地蔵盆の運営（地蔵の管理、および地蔵盆の企画・実施）の実態を明らかにし、次に、地域コミュニティを取り巻く状況変化への“適応”という課題を考える上で関連が深い“レジリエンス”の概念を手掛かりとして、地蔵盆が地域の自治力低下という問題の解決に寄与する可能性について明らかにすることを目的とする。

1. 2. 研究の対象と方法

1. 2. 1. 研究の対象：京都市の都心部に位置する3つの元学区

研究の対象は、京都市の都心部に位置する待賢元学区、城巽元学区、有隣元学区である。図1に位置、表1に概要を示す。これらの元学区では、地域との関わりが持ちづらい傾向があると言われる居住者層である共同住宅世帯が全世帯の6割から8割という高い割合を占めている。すなわち、1.1.で述べた地域自治力の低下に関わる問題を抱えている地域であると予想される。一方で、近年、共同住宅や居住歴の浅い世帯の地域への参加を促すため

に、元学区としても地蔵盆を開催するなど、様々な取り組みを行っている地域でもある。従って、地蔵盆を通じた地域の問題解決に向けて有益な知見が得られることが期待できる。

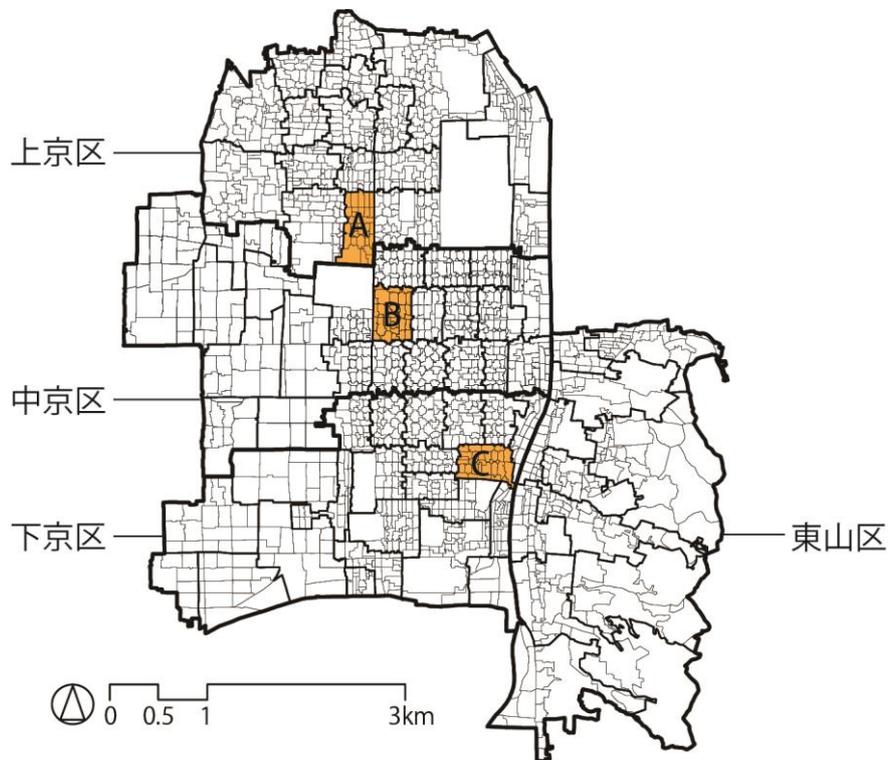


図 1 京都市都心 4 区の区・元学区・町の境界と調査対象元学区の位置

表 1 調査対象元学区の概要 (2010 年時点)

	人口	世帯数	共同住宅 世帯率 (%)	町内数 (*)
A. 待賢元学区	3913	2084	56.8	29
B. 城巽元学区	4902	2918	80.6	28
C. 有隣元学区	4283	2793	80.4	27

* マンション町 (マンション一棟で町内会を構成する町内) を含まない

1. 2. 2. 研究の方法

本研究では、3.1.1.における考察は既往の文献などを元に行っているが、それ以外の分析はすべて現地調査で得られた資料を元に行っている。現地調査は、1.2.1.で述べた元学区、ならびに町内の協力を得て、下記の3つを実施した。

(1) 地蔵盆の運営実態に関するアンケート調査

対象：調査対象3学区における全ての町内会 (計 93 町内) の会長

内容：地蔵の特徴、地蔵の管理、地蔵盆の運営、町内会の運営など⁵

方法：自治連合会などの自治組織を通じて町内会長に配布し、郵送により回収

期間：2012年6月～9月

有効回答率：91%

(2) 地蔵盆当日の様子および参加者に関する現地調査

対象：地蔵盆を開催する町内・計 63 か所のうち 55 か所、学区単位の地蔵盆・計 3 か所

内容：地蔵盆における行事の内容、スケジュール、場所、参加者の数・構成⁶など

方法：地蔵盆当日に研究代表者、共同研究者、研究代表者が所属する大学研究室の学生等（延べ 58 人）が訪問し、目視、ヒアリング、簡易アンケート調査などを実施

期間：2012 年 8 月 18 日、19 日、25 日、26 日（当日調査）、4 日、5 日（事前調査）

(3) 地蔵盆運営の経緯に関するインタビュー調査

対象：地蔵盆の行事の内容や運営の方法に特色がみられる町内

内容：町内会および地蔵盆の運営の経緯や取り組みの内容

方法：町内について詳しい居住者に対するインタビューを実施

期間：2012 年 9 月～2013 年 3 月

1. 3. 研究の構成

3.1.ではまず、既往の研究などを元に、レジリエンス、地域、地蔵盆の関係について整理し、レジリエントな地域の条件、および地蔵盆の位置付けを明確化する。次に、主にアンケート調査を元にして、地蔵盆の運営の実態を明らかにする。さらに、上記を踏まえて、地蔵盆が継続してきた要因についてレジリエンス論の観点から考察する。

つづく 3.2.では、地蔵盆が地域のレジリエンス向上に役割を果たしているか、果たしているとすればどのような役割を果たしているかを明らかにする。ここで、「地域のレジリエンス向上」とは、3.1.で指摘した「レジリエントな地域の条件」に則して、「①より多様な主体が、②複数の経路で地域に関与している状態となること」を指すこととする。

なお現在、京都市都心部では、マンション居住者や新規居住者が町内会に加入していないケースも多くみられ⁷、町内会という経路だけを見ると、多様な主体が地域に関与できているとは言いがたい状態である。そこで本研究は、地蔵盆という経路を介した、マンション居住者や新規居住者の町内会を含む地域との関わりに焦点を当てる。

2. 研究のオリジナリティ

本研究に関連する、京都の地蔵盆を扱った既往の研究には、まず、民俗学、歴史学、宗教学などにおける地蔵盆の受容と展開に関する研究（林 1997、林 2008）や地蔵盆の宗教史的研究（清水 2011）などの研究がある。本研究は、このような地蔵盆それ自体に焦点を当てた研究というよりは、むしろ、地蔵盆と都市・地域の関係に焦点を当てた研究として、まずは位置付けられる。

地蔵盆と都市・地域の関係についての研究は、まず、地蔵盆と空間の関係を対象としたものが主に建築学の分野にみられる。地蔵盆とその開催単位や演出空間等の関係に関する一連の研究（野口 1978、野口・高橋 1979 など）や、地蔵盆と子どもの発達保障の空間づくりに関する研究（西村・室崎・森 1986）、地蔵の配置と都市空間の成り立ちの関係に関する研究（竹内・布野 1999）などがある。

つぎに、地蔵盆と地域運営の関係を対象とした研究が建築学、都市社会学などの分野にみられ、祇園祭の山鉾町における祭や地蔵盆を通じたマンション住民と地域との関わりの実態に言及したもの（坂井・鳴海・澤木・岡 2002）、都心部のマンション増加地域におけるコミュニティ運営と地蔵盆の活用事例を紹介したもの（田中 2010）、都心部における地蔵盆の運営や元学区の地蔵めぐりイベントを介した住民間の関係に関するもの（前田・高田ほか 2011）などがある。

以上の既往研究の成果を踏まえると、本研究のオリジナリティは、まず、地蔵盆を地域運営におけるコミュニティ形成、および主体育成の“触媒”と位置付ける点にあると言える。さらに、少子高齢化等の変化の影響が不確実な形で地域に表れる状況においても、地蔵盆が継続し、その“触媒”としての役割を果たしているかどうかを実証的に明らかにする点にもオリジナリティがあると考ええる。

なお、上述した既往の研究においても、地域運営における地蔵盆の意義は指摘されている（田中 2010）。また、地蔵盆が、都市空間やコミュニティの変化に素早く反応し、変化の受け皿となっていることも指摘されている。例えば、地蔵盆の観察を通じて町内という基本単位の再編（分割、統合）の必要性（野口・高橋 1979）や、マンションと地域の間における元学区単位の行事の有効性（坂井・鳴海・澤木・岡 2002）などが指摘されている。しかし、これらは必ずしも実証的には明らかにされておらず、地域の自治力低下という問題が顕在化している現代において、地蔵盆の運営の実態とその役割を明確にする本研究の意義は大きいと考える。上述のような、現代のコミュニティをめぐる変化や不確実性といった問題への意識から、本研究では、レジリエンス論を援用する。

3. 研究内容

3. 1. 地蔵盆の運営実態とレジリエンス論からみたその継続要因

3. 1. 1. レジリエンス、地域コミュニティ、地蔵盆

（1）“レジリエンス”とは

「レジリエンス」(Resilience) は現在、人間の精神（加藤・八木 2009 など）、組織や経済（Hollnagel 2006, Bahadur 2010, 京大・NTT2012 など）、生態系（Berkes 2008, Goldstein 2011 など）といった様々な分野で議論されている概念であり、「あるシステムが不確実な変化にも適応し、その基本的な特徴を維持する能力」と定義される⁸。ある予測された環境条件のもとで目的を達成する上では資源を集中化し相互の結びつきを強化することが有効であるが、それは「頑強だが脆弱」(RYF: Robust-Yet-Fragile) なシステムと呼ばれ、予期せぬ変化や脅威には極めて弱い。そして、このような問題構造があらゆる分野にみられる。このような背景から、ある程度の非効率性、資源の分散化や分離を前提としたシステム、すなわちレジリエントなシステムが着目されている。レジリエントなシステムに関しては理論、実証の両面から研究が行われており、レジリエントなシステムの条件についても諸説あるが⁹、本研究では「多様性」(Diversity: システムの要素が“多様”であること)、「冗長性」(Redundancy: 要素間の関係に“ゆとり”があること)を条件と捉える。

(2) “レジリエントな地域”とは

(1) で述べた「レジリエントなシステム」の条件を、地域という社会システムに当てはめると、「レジリエントな地域」の条件とは、①価値観の異なる“多様”な主体が地域に関与していること、②主体間の関係に“ゆとり”があること、の2点であると理解できる。

このことを模式的に示したのが図2である。図2のAは、コミュニティ内の主体間の関係に単数の経路しか存在しないことを表す。一方、図2のBは、主体間の関係に複数の経路があることを表す。Bの場合、たとえ一つの経路が何らかの理由で機能しなくなったとしても、別の経路を通じて主体間の関係が保たれ、コミュニティ全体として（少なくとも一つは）関係が保全される。したがって、Aに比べてBはよりレジリエントである。このように、主体間に複数の経路があることは、不確実な変化への対応を可能にする“ゆとり”をもたらすという意味で重要である。しかし、コミュニティに変化や問題が特に存在しない（と感じられている）時には、このような“ゆとり”の価値はコミュニティの成員に認識されず、場合によっては“無駄”と捉えられ、維持が困難となる。そのため、コミュニティがレジリエントであるためには、複数ある関係を維持するための努力や、本来重要であるが場合によっては無駄とも捉えられる関係に対する何らかの意味づけが必要である。

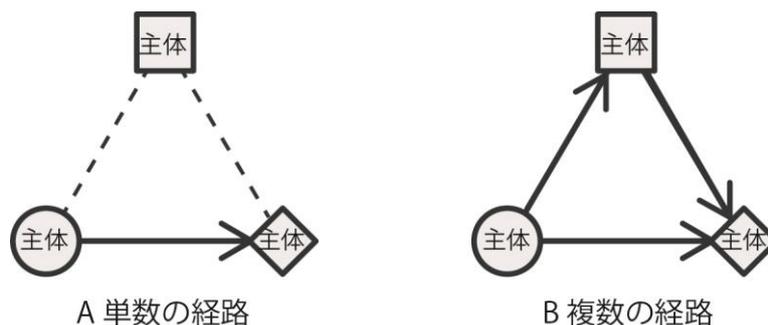


図2 コミュニティにおける主体間の関係

(3) 地蔵盆の位置付け

京都において地蔵盆は、それぞれの町内で営まれ、一般的に町内会の行事の一つとして行われている。そのため、基本的に、町内会に所属している者が地蔵盆に参加すると考えてよい。ただし、町内会と地蔵盆では居住者の参加目的等が本質的に異なり、町内会を介した関係と地蔵盆を介した関係は、異質な関係である。すなわち、町内会の活動は生活環境の維持・管理を第一義的な目的としているが¹⁰、それに対して、地蔵盆で行われる行事は、(結果的に貢献していることはあっても)本来それを目的としていない。さらに、地蔵盆における様々な行事にはそれぞれ目的があり、そこから多様な関係が派生している。

地蔵盆は民間信仰と地域共同体が結びついた高い文化的・歴史的価値を有する資源として知られるが、本研究では上述のような地蔵盆によって発生する様々な主体の関与、主体間の関係性に着目し、地蔵盆を地域のレジリエンス向上に寄与する社会的価値を有する資源として位置付ける¹¹。そして、地蔵盆それ自体に備わるレジリエントなシステムとしての性格、および地域のレジリエンス向上の“触媒”としての地蔵盆の役割に着目する。

3. 1. 2. 京都市都心部における地蔵盆の運営実態

(1) 地蔵とその管理

まず、表2に示すように、調査対象とした3つの元学区では7割から8割強の町内が地蔵を保有していることが明らかになった。

表2 町内が保有している地蔵の有無

	待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
あり	23	85.2	17	70.8	23	76.7	63	77.8
なし	3	11.1	6	25.0	7	23.3	16	19.8
その他	1	3.7	1	4.2	0	0.0	2	2.5
合計	27	100.0	24	100.0	30	100.0	81	100.0

表3に示すように、保有している地蔵の形質は、石像や木像であることが多く、一部で掛け軸の地蔵もみられる。

表3 町内が保有している地蔵の形質（複数回答）

	待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
石像	16	55.2	14	51.9	13	52.0	43	53.1
木像	13	44.8	9	33.3	11	44.0	33	40.7
掛け軸	0	0.0	4	14.8	1	4.0	5	6.2
合計	27	100.0	27	100.0	25	100.0	81	100.0

また、表4に示すように普段、地蔵を保管している場所は、個人宅の敷地内、マンションの敷地内、寺院の敷地内が6割を占めることが明らかになった。すなわち、地蔵は普段、私有地で保管されていることが多く、特に、待賢学区、城巽学区では半数以上が個人宅の敷地内で保管されている。地蔵は室内で保管されている場合もあり、上述した掛け軸の地蔵はすべて室内で保管されている。

表4 地蔵の保管場所（複数回答）

	待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
道路・路地沿い	2	6.5	1	4.8	10	35.1	13	16.3
個人宅の敷地内	19	61.3	11	52.4	3	10.7	33	41.3
マンションの敷地内	2	6.5	1	4.8	5	17.9	8	10.0
寺院の敷地内	3	9.7	1	4.8	6	21.4	10	12.5
その他	5	16.1	7	33.3	4	14.3	16	20.0
合計	31	100.0	21	100.0	28	100.0	80	100.0

そして、地蔵の管理には、花・水の交換、祠の掃除、賽銭の回収などがあり、町内の人々によって行われている。花・水の交換を例に管理の体制をみると、表5に示すように、「町内会の役員が行う／役員に限らず町内の住民が行う」、「年交替の輪番／週または月交替の

「輪番／輪番なし」など、様々な体制が取られていることが明らかになった。このことから、地蔵の管理には町内の人手や管理の負担などの事情に応じた体制が採用されていることが推測できる。

表 5 地蔵の管理体制（花・水の交換、複数回答）

	待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
町内会役員が週または月交替で輪番	3	10.3	2	11.8	7	26.9	12	16.7
町内の住民が週または月交替で輪番	4	13.8	5	29.4	7	26.9	16	22.2
町内会役員が一年交替で輪番	5	17.2	0	0.0	2	7.7	7	9.7
町内の住民が一年交替で輪番	4	13.8	1	5.9	1	3.8	6	8.3
特定の人はずっとしている（輪番なし）	10	34.5	3	17.6	5	19.2	18	25.0
その他	3	10.3	6	35.3	4	15.4	13	18.1
合計	29	100.0	17	100.0	26	100.0	72	100.0

（２）地蔵盆の開催（規模、行事内容、位置付け）

まず、表 6 に示すように、いずれの元学区でも 8 割以上の町内で地蔵盆が開催されていることが明らかになった。地蔵盆が無い町内は、共同住宅一棟で構成されている町内（いわゆるマンション町）や幹線道路沿いで居住人口がほとんど無い町内であり、それらを除いてはほぼ全ての町内で地蔵盆が開催されていることが明らかになった。

表 6 地蔵盆の開催の有無

	待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
あり	24	88.9	20	83.3	24	80.0	68	84.0
なし	3	11.1	4	16.7	6	20.0	13	16.0
合計	27	100.0	24	100.0	30	100.0	81	100.0

次に、表 7 に示すように、地蔵盆の開催規模は、平均 40 人～60 人程度であることが明らかになった。さらに、開催規模は、最大 135 人、最少 3 人であり、かなりの幅があることがわかる。特に、少人数でも地蔵盆が続けられていることは、地域運営の担い手が不足しがちな地域でも地蔵盆は開催可能であることを示唆する知見として興味深い。

表 7 地蔵盆の開催規模（事前の参加呼び掛け人数）

	待賢	城巽	有隣	全体
最大	112 人	135 人	83 人	135 人
最小	20 人	13 人	3 人	3 人
平均	約 61 人	約 48 人	約 40 人	約 50 人

また、表 8 に示すように、地蔵盆を行うために、道路・路地、個人宅、マンション、事務所、寺・神社など様々な場所が利用されている。多くの町内が、私有地を地蔵盆の開催に利用しており、特に待賢学区、城巽学区では半数以上の町内が個人宅の敷地または建物を利用している。

表 8 地蔵盆の開催場所（複数回答）

	待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
祠の周辺	4	16.7	3	15.0	3	12.5	10	14.7
道路沿い	2	8.3	2	10.0	3	12.5	7	10.3
路地沿い	0	0.0	1	5.0	1	4.2	2	2.9
個人宅の敷地内	12	50.0	9	45.0	5	20.8	26	38.2
個人宅の室内	4	16.7	12	60.0	5	20.8	21	30.9
マンションの敷地内	1	4.2	0	0.0	1	4.2	2	2.9
事務所等の敷地内	2	8.3	0	0.0	2	8.4	4	5.9
寺・神社の敷地内	3	12.5	3	15.0	2	8.4	8	11.8
町外の施設	1	4.2	0	0.0	0	0.0	1	1.5
その他	1	4.2	0	0.0	1	4.2	2	2.9

次に、表 9 に示すように、地蔵盆では様々な行事が行われていることが明らかになった。ここでは、行事を「仏事系」、「配布系」、「遊び系」、「食事系」、「その他」の 5 つに分類している。仏事系のうち「お飾り」や「読経」、配布系のうち「おやつの配布」、「お下がりの配布」は 7 割～9 割の町内で行われており、必須性の高い行事であることが読み取れる。一方、それ以外の「数珠まわし」（仏事系）、「子どもの遊び」、「ゲーム」（遊び系）、「足洗い」（食事系）等は、実地調査を踏まえると、町内の人口構成（参加人数、子どもの多寡など）や運営上の負担能力に応じて取捨選択されている行事であると推測される。

表 9 地蔵盆で行われる行事（複数回答）

	待賢		城巽		有隣		合計		
	町内	%	町内	%	町内	%	町内	%	
仏事系	地蔵のお飾り	21	87.5	18	90.0	23	95.8	62	91.2
	数珠まわし	15	62.5	11	55.0	14	58.3	40	58.8
	仏僧による読経	17	70.8	13	65.0	21	87.5	51	75.0
	お寺のお参り	1	4.2	1	5.0	2	8.3	4	5.9
配布系	おやつの配布	20	83.3	15	75.0	16	66.7	51	75.0
	お供えのお下がりの配布	18	75.0	18	90.0	17	70.8	53	77.9
	子ども向けの福引	15	62.5	8	40.0	11	45.8	34	50.0
	大人向けの福引	11	45.8	6	30.0	9	37.5	26	38.8
遊び系	子どもの遊び（金魚すくい等）	12	50.0	8	40.0	9	37.5	29	42.6
	ゲーム（ピンゴ・数当て等）	12	50.0	7	35.0	12	50.0	31	45.6
	ショー・出し物	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
食事系	昼食会	6	25.0	4	20.0	7	29.2	17	25.0
	夕食会	8	33.3	3	15.0	2	8.3	13	19.1
	足洗い	9	37.5	10	50.0	6	25.0	25	36.8
	ホテル等での懇親会	1	4.2	0	0.0	1	4.2	2	2.9
	その他	3	12.5	2	10.0	4	16.7	9	13.2

さらに、表 10 に示すように、町内における地蔵盆の位置付けには、「子どもの安全祈願」や「先祖の供養」といった従来のものがある。一方で、「大人の集まり」や「住民の親睦」、「町内の伝統行事」といった必ずしも従来のではないものもあることが明らかになった。こういった位置付けの変化からは、少子高齢化や信仰と地域の分化といった近年の社会構造の変化に地蔵盆が適応していることが読み取れる。また、「地蔵があるので続けてきた」

や「世話役が回って来るので続けてきた」という回答もみられ、地蔵盆は地域にとって簡単にはやめられない行事であることが窺える。

表 10 町内にとっての地蔵盆の位置付け（複数回答）

	待賢		城巽		有隣		合計	
	町内	%	町内	%	町内	%	町内	%
子どもの安全の祈願	18	75.0	13	65.0	19	79.2	50	73.5
先祖の供養	10	41.7	10	50.0	14	58.3	34	50.0
商売繁盛の祈願	3	12.5	0	0.0	1	4.2	4	5.9
大人の集まり	4	16.7	2	10.0	6	25.0	12	17.6
地域住民の親睦	20	83.3	18	90.0	21	87.5	59	86.8
家族・親戚が集まる機会	1	4.2	1	5.0	1	4.2	3	4.4
町内の伝統行事	19	79.2	15	75.0	19	79.2	53	77.9
地蔵があるので続けてきた行事	11	45.8	12	60.0	14	58.3	37	54.4
世話役が回って来るので続けてきた	5	20.8	5	25.0	6	25.0	16	23.5

（3）地蔵盆を続ける上での町内の懸念

表 11 に示すように、全体のうち 3 割強の町内が、地蔵盆を今後続けていく上で何らかの懸念があると答えている。

表 11 地蔵盆を続けて行く上での懸念の有無

	待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
ある	8	33.3	8	40.0	7	29.2	23	33.8
ない	15	62.5	10	50.0	14	58.3	39	57.4
わからない	1	4.2	2	10.0	3	12.5	6	8.8
合計	24	100.0	20	100.0	24	100.0	68	100.0

表 12 に示すように、懸念の内容は、地蔵の管理や地蔵盆の運営における人手の不足や場所の問題など様々であることが明らかになった。

表 12 地蔵盆を続けて行く上での懸念の内容

	待賢		城巽		有隣		合計	
	町内	%	町内	%	町内	%	町内	%
地蔵を管理する人の不足	3	37.5	1	12.5	3	42.9	7	30.4
地蔵を管理する資金の不足	1	12.5	0	0.0	0	0.0	1	4.3
地蔵を保管する場所の問題	2	25.0	3	37.5	1	14.3	6	26.1
地蔵盆を運営する人の不足	1	12.5	3	0.0	3	42.9	7	30.4
地蔵盆を運営する資金の不足	1	12.5	0	0.0	0	0.0	1	4.3
地蔵盆を開催する場所の問題	2	25.0	6	75.0	1	14.3	9	39.1
地蔵盆に参加する人の減少	3	37.5	3	37.5	5	71.4	11	47.8
知識や要領の継承の困難化	2	25.0	3	37.5	2	28.6	7	30.4
その他	0	0.0	0	0.0	1	14.3	1	4.3

場所の問題の背景には、インタビュー調査などによると、自動車の普及に伴う道路空間からの人の排除や開発に伴う路地空間の減少などがある。以前は、地蔵の保管や地蔵盆の

開催のために、道路や路地などの公有地も利用されていたが、上記のような理由からその利用が困難となり、場所の不足が地蔵盆を続ける上での懸念となったと考えられる。また、懸念の内容には、地蔵盆の参加者の減少や、地蔵盆に関する知識や要領の継承の困難化もあることが明らかになった。これら問題の背景には、少子高齢化による町内の弱体化があると考えられる。一方で、特に京都市都心部には、近年、いわゆる都心回帰現象によって人口が増加している町内もみられる。しかし、このような町内においても、増加人口の主な受け皿は、町内会との関わりが一般的に持ちづらいマンション等の共同住宅であり、やはり町内の弱体化が進行している。

(4) 元学区単位での地蔵盆の取り組み

地蔵盆は本来、町内単位の行事であるが、図3に示すように、近年は元学区単位の地蔵盆も開催されている。

<p style="text-align: center;">たいけん地蔵盆</p> <p>マンションの子どもや、地蔵盆がない町内のために2012年から開始された。8月26日に元待賢小学校で開催され、約50名の参加者が数珠回しや行灯作り等を楽しんだ。</p> <p>10:00 受付開始 11:00 読経、数珠廻し、住職の話 11:15 おやつ配付、子どもたち遊び 12:00 昼休み(焼きそばの提供あり) 13:00 行灯づくり 14:30 大道芸 15:00 景品渡し ~ 16:30 行灯づくり続き、後片付け 19:00 星空上映会</p>	
<p style="text-align: center;">城巽地蔵盆</p> <p>マンションの子どもにも地蔵盆を知ってもらうために2004年から開催されている。2012年は8月19日に城巽自治会館で開催され、雨天にもかかわらず約70名が参加し、数珠回し、福引等を楽しんだ。</p> <p>14:00 受付開始 ~ 14:30 自由時間(輪投げ等) 14:30 会長挨拶 14:35 読経、数珠廻し 15:15 福引き、かき氷 ~ 15:50 自由時間(おやつ配布) ~ 16:30 片付け</p>	
<p style="text-align: center;">いきいき有隣地蔵巡り</p> <p>2002年から元学区の地蔵盆に取り組んでおり、2010年および2011年は地域の資源であるお地蔵さんについてよりよく知ってもらうために、計9町内・10カ所の地蔵をチェックポイントとするスタンプラリーを行った。また、松原通りへの露店の出店や歩行者天国化をあわせて行い、学区外からの参加を含め、100人以上の参加者で賑わった。</p>	

図3 元学区単位の地蔵盆の概要

元学区単位の地蔵盆の開催の経緯や意図は様々であるが、いずれの元学区においても、地蔵盆が元々無いマンションや地蔵盆が行われなくなった町内の子どものために開始されたという点は共通している。元学区単位の地蔵盆は、開催の規模や行事の内容、位置付けを変化させながら、近年のマンション建設やそれに伴う町内の弱体化といったそれぞれの地域の課題に対応しようとしている。

3. 2. 地蔵盆と地域のレジリエンス向上の関係

3. 2. 1. 町内単位の地蔵盆における地域のレジリエンス向上

(1) マンション住民と町内会の関わり

図4に示すように、マンション住民と町内会の関わりには、「A.マンション住民が町内会に加入していない」、「B.マンション住民の一部が町内会に加入している」、「C.マンション住民の全員が町内会に加入している」の3パターンが考えられる^{1,2}。

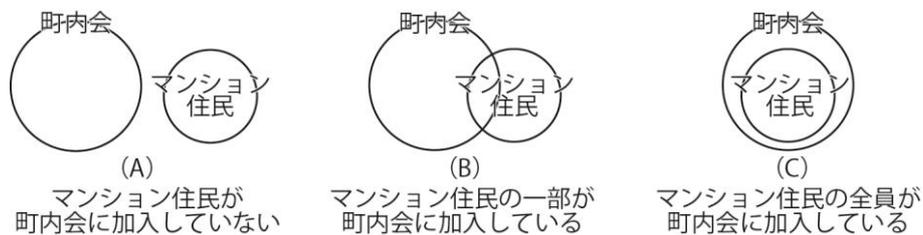


図4 マンション住民と町内会の関わり

(2) 地蔵盆を介したマンション住民と町内会の関わり

さらに、地蔵盆を介した地域との関わりを考慮すると、図5に示すように、地蔵盆を介したマンション住民と町内会の関わりには7パターンが考えられる。

		マンション住民の地蔵盆への関わり		
		1. 全世帯関わり無し	2. 町内会加入世帯のみ関わり有り	3. 町内会非加入世帯も関わり有り
マンション住民の町内会への関わり	A 全世帯非加入	A-1		A-3
	B 一部世帯加入	B-1	B-2	B-3
	C 全世帯加入	C-1	C-2	

<凡例> 町内会 マンション住民 地蔵盆に関わりがある居住者の範囲

図5 地蔵盆を介したマンション住民と町内会の関わり

そして、図 6、図 7 に、アンケート調査および地蔵盆当日の調査を元に把握した、計 45 町内における地蔵盆を介したマンション住民と町内会の関わりの実態を示した。

図 6 に地蔵盆への参加呼び掛けからみたマンション住民と町内会の関わりの実態を示す。

		マンション住民の地蔵盆への参加呼びかけ		
		1. 全世帯呼び掛け無し	2. 町内会加入世帯のみ呼び掛け有り	3. 町内会非加入世帯も呼び掛け有り
マンション住民の町内会への関わり	A 全世帯非加入	A-1 T06 T20 J02 J28 Y13 T09 T25 J09 J27 Y14 T10 T26 J10 Y15 T12 T29 J12 Y24 T15 J22 Y25		A-3 T28
	B 一部世帯加入	B-1,C-1 T08 J05 T11 J13 T24 J19 J21	B-2,B-3,C-2 T14 J01 J16 Y02 Y12 T27 J04 J17 Y03 Y26 J06 Y07 J07 Y09 J15 Y10	
	C 全世帯加入			

<凡例> T11 町内番号
T11 元学区記号 T: 待賢元学区, J: 城巽元学区, Y: 有隣元学区

図 6 事前の参加呼び掛けからみたマンション住民と町内会の関わりの実態

町内会に加入していないマンション住民にも参加呼び掛けが行われる町内も一部で見られるが (T28)、マンション住民にも参加呼び掛けが行われているのは、マンション住民の一部または全てが町内会に加入している町内 (T14、J01、Y02 等) においてであることが明らかになった。このことから、町内会への加入が地蔵盆への参加呼び掛けが行われるための必要条件であることが読み取れる。

図 7 に、地蔵盆への事前の参加呼び掛けに加え、「当日の参加」も含めてみた場合のマンション住民と町内会の関わりの実態を示した。

		マンション住民の地蔵盆への参加		
		1. 全世帯参加無し	2. 町内会加入世帯のみ参加有り	3. 町内会非加入世帯も参加有り
マンション住民の町内会への関わり	A 全世帯非加入	A-1 T09 J02 Y14 T20 J09 Y15 T29 J10 Y24 J12 Y25 J27		A-3 T06 T28 J22 Y13 T10 T29 T12 T15 T26
	B 一部世帯加入	B-1,C-1 T08 J05 T11 J13 J19 J21	B-2,B-3,C-2 T14 J01 J16 Y02 Y12 T24 J04 J17 Y03 Y26 T27 J06 Y07 J07 Y09 J15 Y10	
	C 全世帯加入			

図 7 当日参加からみたマンション住民と町内会の関わりの実態

事前の参加呼び掛けがなかったが、マンション住民が当日参加している町内（T24、あるいは T06、J22、Y13 等）があり、地藏盆を介して町内会と関わりをもつマンション住民が図 6 に比べて増えていることが明らかになった。このことから、地藏盆が、町内会に加入していない住民や町内会に加入しているが行事には積極的には参加していない住民が町内と関わる契機となっていることが読み取れる。

（3）各町内の事例にみる地藏盆を介した関わりの実態

・城巽学区 S 町（J10）

城巽学区 S 町（J10）は、図 8 に示すように、地藏のお飾り、仏僧による読経、数珠廻し、足洗いといった少ない行事で地藏盆を開催している。町内の居住者・全 243 世帯のうちマンション居住者が 230 世帯であり、全体の約 95%を占める。地藏盆に参加するのは大人 25 人、子ども 5 人ほどであり、すべて戸建て住宅の居住者である。マンションの世帯は町内会に所属しておらず、幹線道路沿いの特に大規模な 2 棟はマンションだけで独立した町内会を構成している。インタビューによると、マンション住民に地藏盆への参加を希望する者がいた場合、町内として拒否はしないが、基本的には元学区の地藏盆（城巽地藏盆）を案内しているという。S 町では毎年、町内会長の個人宅を地藏盆の会場としており、小さな空間で行事を行っている。このことから、町内会の現所属世帯に比べて極めて数が多いマンション世帯を町内の地藏盆で受入れることは物理的に困難であると考えられる。

○行事スケジュール	○参加者（目視により把握）
8:00 お飾り	—大人 30 人ぐらい
14:30 僧侶による読経 数珠まわし	—大人 10 人 子ども 3 人
16:00 片付け	
18:00 足洗い (近くの飲食店で)	

○町内の人口と世帯構成（2010 年現在）			
人口	431 人	うち 14 歳以下	63 人 (14.6%)
		65 歳以上	54 人 (12.5%)
世帯数	243 世帯	うち一戸建て	12 世帯 (5.0%)
		長屋建て	0 世帯 (0.0%)
		共同建て	231 世帯 (95.0%)



図 8 城巽学区 S 町の地藏盆の様子

・城巽学区 T 町（J04）

城巽学区 T 町（J04）は、図 9 に示すように現在、2 日間を通じて様々な行事が行われており、賑やかな地藏盆が行われていると言える。以前は、子どもの数が減り読経やおやつのお配りだけを行うなど、地藏盆を簡略化していた。しかしここ 10 年から 20 年の間にファミリー向けの分譲マンションが町内に数棟建設され、小さな子どもをもつ世帯が増えた。

町内の住民の努力や工夫の甲斐もあり、マンションの世帯も地蔵盆に積極的に関わるようになり、現在のような賑やかな地蔵盆が復活した。なお、上述した工夫の一例としてT町の町内会には「町内会の役員をするのは入居後5年経ってから」という規約がある。このような規約は、新しい居住者が町内に馴染むには、ある程度の期間が必要であろうという配慮から作成された。ただ、地蔵盆には居住年数5年以下の居住者も参加しており、地蔵盆が地域コミュニティに関わるきっかけとなっていることがわかる。



図 9 城巽学区 T 町の地蔵盆の様子

・城巽学区 O 町 (J06)

城巽学区 O 町 (J06) では、約 30 年前に町内にマンションが建設された。当初は、図 5 の C-1 のように、マンションの住民は町内会に加入する（会費を支払う）だけで、地蔵盆等の町内行事にはほとんど関わっていなかった。しかし、8 年ほど前から町内会の運営に携わる人を増やしたいという思いから、まずは、町内会の役員が中心となって、マンションの居住者にも地蔵盆への参加を積極的に呼び掛け始めた。その結果、図 5 の C-2 の状態となった。さらにその 2 年後、マンションの居住者も町内会の他の行事や運営にも参加するようになった。このように O 町では地蔵盆によってマンション住民が町内会と関わるきっかけが生まれ、さらに、町内会の役員を担うマンション住民が現れるなど、より深い関わりを形成していることがわかる。

・待賢学区 H 町 (T29)

待賢学区 H 町 (T29) では、事前アンケート調査の結果によると、マンションの住民には参加の呼び掛けを行っていない。すなわち、図 5・A-1 の状態である。しかし、当日の調査によると、マンション居住者の地蔵盆への参加がみられた。すなわち、図 5・A-3 の状態のように、町内会という経路ではなく、地蔵盆を通じてマンション住民の地域への関わりが形成させていることが確認された。これには、地蔵盆の行事は道路・路地や住宅のガレージといった人目に留まりやすい場所で開催される場合が多いこと、また、子どもや

その親どうしの付き合いを介して参加者が増えていく、といった地藏盆の特性が関連していると考えられる。

・有隣学区 N 町 (Y02)

有隣学区 N 町 (Y02) は、図 10 に示すように、大人のみで地藏盆を行っている。子どもをもつマンションの世帯にも参加の呼び掛けをしているが、そのような世帯は当日参加していない。ただ、お飾りや読経、数珠廻しの他に、ガーデニング、輪投げ、食事会などの行事を行い、大人だけでも地藏盆を楽しめるように工夫している。行事の内容は毎年少しずつ変えているが、ガーデニングはここ数年毎年行っている。読経や輪投げなどの会場としているビル 1 階駐車場の横にある路地で、花や木を鉢に植える。鉢植えは地藏盆終了後に各自が家に持ち帰り、玄関先などに置いている。このように N 町では、子どもの数が少ないという町内の人口構成にあわせて地藏盆の行事の内容を工夫することで、状況の変化にうまく適応していると考えられる。



図 10 有隣学区 N 町の地藏盆の様子

3. 2. 2. 元学区単位の地藏盆における地域のレジリエンス向上

地藏盆は本来、町内ごとの行事であるが、3.1.2. (4) で述べたように、近年、元学区単位でも地藏盆が行われている。表 13～表 15 に、当日の参加者に対するアンケートをもとに、3つの元学区における参加者の構成を示した。

表 13 たいけん地藏盆における参加者の内訳

		自分の町内に地藏盆がない	自分の町内に地藏盆がある		合計
			町内の地藏盆にも参加	町内の地藏盆には非参加	
学区内居住者	戸建・長屋居住者	10 人	11 人	0 人	21 人
	マンション居住者	8 人	0 人	4 人	12 人
学区外居住者		—	—	—	9 人

表 14 城巽地蔵盆における参加者の内訳

		自分の町内に 地蔵盆がない	自分の町内に 地蔵盆がある	合計
学区内居住者	戸建・長屋居住者	0人	18人	18人
	マンション居住者	0人	31人	31人
学区外居住者		—	—	12人

表 15 いきいき有隣地蔵巡り（2010年）における参加者の内訳

		自分の町内に 地蔵盆がない	自分の町内に 地蔵盆がある	合計
学区内居住者	戸建・長屋居住者	9人	46人	55人
	マンション居住者	0人	15人	15人
学区外居住者		—	—	22人

いずれの元学区においても、地蔵盆を開催していない町内の居住者や、地蔵盆への参加が困難である居住者が元学区の地蔵盆に参加していることが明らかになった。なお、「たいけん地蔵盆」、「城巽地蔵盆」では、参加者の約9割は居住年数が10年以下の新規居住者であった。これらのことから元学区単位の地蔵盆は、町内との関わりを持ちづらい居住者が、地域と関わるきっかけを持つ上での有効な経路となっていることが読み取れる。



図 11 いきいき有隣地蔵めぐり（2010年）における協力町内・協力者の分布

その典型として有隣学区では、約10年前に「マンションの子どもたちのための地蔵盆」を開催し、2年目以降は、学区内の全ての子どもとの交流を目指して「有隣ふれあい地蔵盆」を継続的に開催してきた。さらに2010年、2011年には「いきいき有隣地蔵巡り」が行われた。図11に示すように、「いきいき有隣地蔵めぐり」では、スタンプラリーのためのチェックポイントが各町内の町内会役員や住民の協力のもと設営された。このことから、町内の住民が元学区という、より広域な地域の運営に積極的にに関わり、また、町内会どうしの連携を深める上でも、地蔵および地蔵盆が役割を果たしたことがわかる。

4. 結果と考察

まず、3.2.において、研究対象とした3つの元学区における地蔵盆の運営（地蔵の管理、および地蔵盆の企画・実施）の実態が明らかになった。地蔵盆はいずれの元学区においても8割以上の町内で継続されていることが明らかになり、現在においても地域社会に定着した行事であり続けていることがわかった。特に、地蔵盆の開催形態（開催規模、行事内容）および位置付けは実に多様であり、このことは3.1.でレジリエンスに関する既往の研究などを参考として抽出した、①価値観の異なる多様な主体の関与という「レジリエントな地域の条件」と符合する。また、地蔵盆の多様な行事内容や複数の開催単位（町内と元学区）によって地蔵盆の運営者と参加者、および参加者同士の関わりに“複数の経路”（ゆとり）が形成されており、このことは②主体間の関係の“ゆとり”という条件と符合する。このように、地蔵盆の運営にはレジリエントなシステムとしての性格が備わっており、このことが地蔵盆を継続させてきた要因であると考えられる。

さらに、3.3.において、マンション住民や新規居住者に多くみられる、町内会に加入していない居住者、あるいは町内会に加入しているが行事への参加などに積極的ではない居住者が、地蔵盆を通じて地域に関わるきっかけを得ていることが明らかになった。また、その結果として、地域の運営を担うまでに至っている事例もあることが明らかになった。このことから、地蔵盆は、地域に関与する“主体の多様化”、および地域に関わる上での“経路の複数化”に寄与しており、地域のレジリエンス向上に役割を果たしていることは確実である。すなわち、地域運営における“触媒”としての地蔵盆の可能性が明らかになった。

5. 京都市への実践的な提言

本研究で明らかにしたように、地蔵盆は、地域コミュニティ形成や地域運営の主体育成の“触媒”であり、地域のレジリエンス向上に寄与している。このことから地蔵盆は、今後の都市やコミュニティをめぐる政策の資源になりうると思われる。

ただ、ここで改めて強調しておきたいのは、地蔵盆を政策のために安易に手段化してはならないということである。地蔵盆の価値は地域の人々によって感覚的に認識されているものであり、また、手軽に開催できて老若男女が楽しめる地蔵盆を続けるということ自体が地域の人々にとって目的である。本研究を通じて明らかにしてきたように、地蔵盆の本質は、“ゆとり”のある関係性であり、そういった関係性を大切にすることこそが、地域のレジリエンスを高め、都市を持続可能にするのである。

このことを十分に踏まえた上で、今後、現在および将来における都市問題の緩和に向けて、地蔵盆をまちづくり政策やコミュニティ政策の文脈で再評価し、積極的に活用していくことが望ましい。具体的には、近年弱体化が危惧されている町内会に対するエンパワーメントの手段として、あるいは、元学区のようなより広域な地域コミュニティにおける協力的行動の促進や合意形成の円滑化等の手段として地蔵盆を位置付け、必要に応じて支援・応援していくことが考えられる。以下に、支援・応援の一例を挙げる。

- ・地蔵盆ケース・ブックの発行：地蔵盆の継承・再編に課題を抱えるコミュニティの参考となる情報（地蔵盆の概要、多様な開催形態、工夫の事例など）を紹介する。
- ・元学区等を単位とする地蔵盆への協力：元学区等のより広域な地域コミュニティを単位とする地蔵盆について、地域住民への広報、開催場所の提供などを行う。
- ・NPO・大学等との連携の促進：地蔵盆と併せて行われる行事（特に、防災訓練、エコの奨励、施設との連携といった公益的なもの）にNPO・大学などが協力する。

6. 今後の研究課題

本研究の結果はあくまで、都心部の3つの元学区という限られた地域の分析にもとづくものである。今後は郊外部も含め対象地域を広げて研究を行うことが課題であろう。その際、本研究で考案した調査方法や分析手法を応用することで、地蔵盆の実態および役割により深く迫る実証的な研究が可能になると考えられる。

また、「5.京都市への実践的な提言」で述べた内容とも関連するが、地蔵盆の保護と活用が別個に行われたのでは、大きな効果は期待できず、場合によって相互に阻害することが危惧される。本来、地蔵盆の保護（地蔵盆それ自体の価値を認め継承する）と活用（まちづくり等における地蔵盆の新たな価値を発見し再編する）は相補的な関係になりうると考えられる。そのような関係にするためにも、それぞれの地域が取り組む地蔵盆を活かしたまちづくりの事例に学びつつ、行政の担当課間の連携なども含め、地蔵盆を支援・応援する体制・方策について、より実践的な研究を展開する必要がある。

謝辞

調査では各元学区の自治組織（待賢学区：待賢住民福祉連合協議会、待賢まちづくり委員会、城巽学区：城巽自治連合会、有隣学区：有隣自治連合会、有隣まちづくり委員会）および町内会、住民の方々にご協力を頂いた。ここに記して謝意を表す。

脚注

¹ 京都市のアンケートによると、市全体の自治会・町内会への加入率は69.8%である。また、自治会・町内会の課題については、「地域自体の高齢化・人口減」(62.1%)が最も多く、次いで「役員のなり手不足」(59.3%)、「従業者や参加者の固定化」(23.6%)、「未加入・退会の増加」(15.4%)などとなっている（京都市2013）。

² 京都市には狭域な自治の単位である町内とその運営を担う町内会、および広域な単位である元学区とその運営を担う自治連合会がある。元学区とは明治初期に創設された小学校区を起源としており、元々の学区という意味で元学区あるいは単に学区と呼ばれる。京都におけるコミュニティの単位の成立・再編の歴史については田中2008を参照。

³ 林1997、林2008、清水2011などを参照

⁴ 京都市の近年の動きとして、①既存の法令では保護できない伝統的な無形文化遺産を選定する制度を新設し、その一環として地蔵盆を選定し継承の機運を盛り上げようとする動き、②地蔵盆を、マンション居住者や新規居住者など地域との関わりが持ちにくい傾向がある人々との交流の機会と捉え、コミュニティ活性化に繋げようとする動きがある。

⁵ アンケートにおける質問項目は下記の通りである。①地蔵：地蔵の有無、形質（木像、石像、掛軸など）、安置場所など、②地蔵の管理：管理の体制（年単位／月・週単位、固定／輪番）、費用負担の方法、近年の変化、課題・不安など、③地蔵盆：地蔵盆の有無、行事の内容、開催場所、参加（呼び掛け）、人数・構成、位置付け、近年の変化、課題・不安など、④地蔵盆の運営：企画の決定方法、参加呼び掛けの範囲・方法、費用、負担の方法、当日の役割分担、道具の保管、近年の変化など、⑤地蔵盆を行っていない／行わなくなった理由など、⑥町内会：加入世帯の数・構成、役職の種類・任期・選出方法、町内会費（戸建・長屋・共同）、町内会の行事など

⁶ 参加者については、行事や時間帯ごとに人数（大人と子ども）を目視で把握した。また、参加者にその場で書いてもらう簡易なアンケート調査票を配り（年齢、性別、居住年数、住宅形式（戸建て、長屋、共同住宅）、所有関係（持ち家、借家）、回答を依頼した。

⁷ 研究対象とした3つの元学区においても町内会長を対象としたアンケート調査の結果、戸建て・長屋世帯の町内会加入率が平均90%を超える一方で、マンション世帯の町内会加入率が平均20%を下回っていることが確認された。

⁸ レジリエンスの定義には様々なものがあるが、本研究では、Manyena2006の定義を参考にした。

⁹ レジリエントなシステムの条件が多くの研究者によって示されており、例えば、Bruneau 2003による4R（Robustness, Redundancy, Rapidity, Resourcefulness）、Bahadur2010による10の指標（1.High Diversity, 2.Effective governance/ institutions/ control mechanisms, 3.Acceptance of uncertainty and change, 4.Community involvement and inclusion of local knowledge, 5.Preparedness, planning and readiness, 6.High degree of equity, 7.Social values and structures, 8.Non-equilibrium system dynamics, 9.Learning, 10.Adoption of a cross-scalar perspective）などがある。これらの他にも Hollnagel 2006, Twigg 2007, Zolli 2012 などが参考になる。

¹⁰ 中田実は、自治会・町内会無用論の立場に理解を示しながらも、「地域共同管理」の主体として自治会・町内会の妥当性を主張している。すなわち、ある地域に属すると必ず生じる関わりや問題があり、それらの関わりや調整や問題への対処を総合的に担い、地域住民を代表できる組織として自治会・町内会は必要であるとされている（中田 1998, 中田 2007）。

¹¹ 地蔵盆では宗教行事とともに、様々な遊びが行われる。ここでは深く検討しないが、人間社会の存続における遊びや宗教の意義に関する研究（西村 1989, Wade 2009 など）で指摘されているように、地蔵盆も、地域社会の存続のための効率的な手段として人々に（たとえ無意識であれ）選択されてきたと考えられる。

¹² ここで「町内会に加入している」とは、「町内会費を支払っている」ことを指す。マンション住民は、町内の住民と日常的に接触する機会が少なく、特に管理会社等が一括で町内会費を支払っているところでは、町内会に所属しているという意識が希薄である場合が多い。

引用・参考文献等

- ・ Bahadur,A., Ibrahim,M., Tanner,T. : Resilience renaissance? -Unpacking of resilience for tackling climate change and disasters, SCR discussion paper1, Institute of Development Studies, 2010
- ・ Berkes,F., Colding,J. and Folke,C. : Navigating Social-Ecological Systems -Building Resilience for Complexity and Change, Cambridge University Press, 2008
- ・ Bruneau,M. et al. : A Framework to Quantitatively Assess and Enhance the Seismic Resilience of Communities, Earthquake Spectra, Volume 19, No. 4, pp.733-752, 2003
- ・ Goldstein,A.S. : Collaborative Resilience -Moving Through Crisis to Opportunity, MIT Press, 2011
- ・ Hollnagel,E., Leveson,N. and Woods,D. : Resilience Engineering: Concepts And Precepts, Ashgate Publication, 2006 (北村正晴 監訳 : レジリエンスエンジニアリングー概念と指針, 日科技連出版社, 2012)
- ・ Manyena, S.B. : The Concept of Resilience Revisited, Disasters, vol.30, issue4, pp.433-450, 2006
- ・ Twigg, J. : Characteristics of a Disaster-resilient Community, a guidance note to the DFID DRR Interagency Coordination Group, 2007
- ・ Wade,N. : The Faith InstinctーHow Religion Evolved and Why It Endures, Penguin Press HC, 2009 (依田卓巳 訳 : 宗教を生み出す本能ー進化論からみたヒトと信仰, エヌティティ出版, 2011)
- ・ Zolli,A. and Healy,A.M. : ResilienceーWhy Things Bounce Back, Free Press, 2012 (須川綾子 訳 : レジリエンス 復活力ーあらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か, ダイアモンド社, 2013)
- ・ 加藤敏, 八木剛平 : レジリアンス 現代精神医学の新しいパラダイム, 金原出版, 2009
- ・ 京大・NTT レジリエンス共同研究グループ : しなやかな社会への試練 -東日本大震災を乗り越える, 日経BP コンサルティング, 2012
- ・ 京都市 : 京都市 自治会・町内会アンケート 報告書, 2012
- ・ 坂井裕介, 鳴海邦碩, 澤木昌典, 岡絵理子 : 京都市における元学区及び町内会の活動実態と都心マンション居住者の地域意識に関する研究ー明倫学区を事例として, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系 (42), pp.625-628, 2002
- ・ 清水邦彦 : 京都地蔵盆の宗教史的研究ー祖霊観解明の一手がかりとして, 比較民俗研究 (25), pp.74-90, 2011
- ・ 竹内泰, 布野修司 : 京都における地蔵の配置に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 520, pp.263-270, 1999
- ・ 田中志敬 : マンション増加地域におけるコミュニティ運営ー京都市都心部の町内・元学区を事例として, コミュニティ政策 (8), pp.95-116, 2010
- ・ 田中志敬 : 京都の地域コミュニティと地域運営アソシエーションー町内・町内会と元学区・自治連合会, 鯉坂学, 小松秀雄 編 : 京都の「まち」の社会学, 世界思想社, 2008
- ・ 中田実, 黒田由彦, 板倉達 : 地域共同管理の現在, 東信堂, 1998
- ・ 中田実 : 地域分権時代の町内会・自治会, 自治体研究社, 2007
- ・ 西村清和 : 遊びの現象学, 勁草書房, 1989
- ・ 西村信治, 室崎生子, 森靖夫 : 地蔵盆を通してみた地域の子供の発達保障の空間づくりに関する研究, 日本建築学会近畿支部研究報告, 計画系 (26), pp.509-512, 1986
- ・ 野口美智子 : 京都西陣における地蔵盆の演出空間ー近隣空間の研究, 日本建築学会学術講演梗概集, 計画系, 53, pp.1087-1088, 1978
- ・ 野口美智子, 高橋一雄 : 京都における地蔵盆の開催単位ー近隣空間の研究(2), 日本建築学会学術講演梗概集, 計画系, 54, pp.1161-1162, 1979
- ・ 林英一 : 地蔵盆ー受容と展開の様式, 初芝文庫, 1997
- ・ 林英一 : 明治政府の近代化政策と地蔵盆-地蔵盆の成立をめぐる, 日本民俗学 (255), pp.105-120, 2008
- ・ 前田昌弘, 高田光雄, 安枝英俊, ほか2名 : 京都市都心部における地蔵盆の役割に関する研究 その1~2, 日本建築学会学術講演梗概集 (関東), F-1.分冊, pp.445-448, 2011